

京鹿子

昭和二十三年九月二日創刊
平成十七年五月一日創刊
通巻九六九号（五月一）

5月号

「白壽」特集

春彼岸
丸山佳子

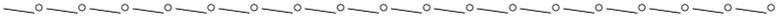
春一番が残して行つたガードマン

竹林で耳そばだてる入彼岸

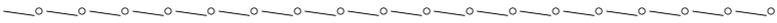
彼岸桜は仏のぬくみ嵯峨御流

つながれし犬が見てゐる鳥雲に





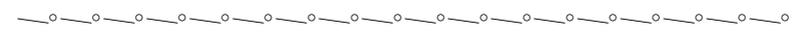
翼張つて自力本願彼岸鳶
カーブミラーの一本あしも杉花粉
初つばめ監視カメラに事なかれ
爪のよく伸びる三月雨もまた
この裕神にも仏にも好かれ
春惜しむ世間知らずの岩にかけ



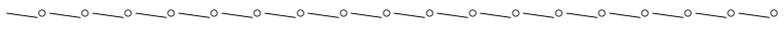
清響集
豊田都峰
その四十九



春霖のひぐれしきりに遠おもひ
越ゆるなどとてものことと野に遊ぶ
風と手を雲と手を組み野に遊ぶ
芦芽ぐみ神となりしより日はひとつ
芦芽ぐむ三上に雲の立ちゐたり
芽ぐませる波に護岸のなにげなさ



風 対 野 末 対 種 播
鳥 帰 る あ か ね の 湖 を 残 し お き
芽 柳 の な び き の 方 と 座 を 決 め む
は く れ ん は 雲 ひ と つ な き 宴 か な
春 風 へ ま た も し て ゐ る 数 合 せ
風 柳 弁 天 さ ん の 赤 き 堀
弁 天 へ ざ わ つ い て ゐ る 花 の 芽 々
春 光 や さ ら に 便 り の 二 つ 三 つ



秀華採集

海鳴りを耳朵に海豹廻りづめ

境 良一

より大きな水槽を作ってもそれは人間の勝手。動物にとっては狭く、広々とした海を恋う。そんな動物の思いを作者は具体的に描いている。対象への思い入れが作品を深める。

鈴鳴らし金柑ほどの願ひごと

坂本 敏子

南座の切符むらさき春隣

森 洋子

前句の願いの量の具体的表現、後句の色と季語との響き合いを評価する。

鈴鹿 仁

十石舟

水温む十石舟の風あそび
鷹鳩に化して浄土の石の黙
蝌蚪生るははの匂ひの母の里
こんな日の蛙の誘ふ畦の道
この世には人語のぬくみ遠蛙
水ごころ得し春の鯉腹白し
春の鯉のらり動かす母郷あり

近 詠

宇都宮滴水

蛇の衣

乱気流声を盗まる初ひばり
山焼きて落人村の烟けむりとす
蝌蚪の水雲の濁りは赦さるる
浮かび来てなほも濡れけり余花の鯉
接木してけじめの付きし影となる
つぎはぎの風もて余す観潮船
蛇の衣記憶の底をくつがへす

神麓集



滑車のみ遺る一の井寒の木瓜
このしろを焼きて嫁かせず石路の絮
鷹神のむかしがもどる鏡割
焚火爆ぜ密寺の比丘尼愚痴こぼす

角 直指

きさらぎの星の心の動き初む
牡蠣啍り低血圧の身を危惧す
春の立つ大地の好きな影法師
退院のタイミング合ふ床の梅
銀鱗の釣果が魚籠に春くらむ

彌 寝 瓶 史

三島忌を口には出さず紅葉狩
三島の忌けんらんとして紅葉照る
赤もいろいろかへで樹林を俯瞰せり
存分にもみぢ見尽し濃き茶飲む
草もみぢ茫々として河細る

丹 生 を だ ま き

主宰受賞祝賀会 山田をがたま
にこやかに受く花束より春あふる
花束に埋もれ佳子師春と化する
春灯に礼装の和服はみな美人
春装のめだつ着流し京男
春花抱き退くや師弟の背の柔し

主宰受賞祝賀会

山田をがたま

寒晴の空の痛さよ印鑑押す
幸せは気付かずに居る寒卵
来し方も行方も不安椿落つ
春寒し一本足の鷺立ちて
水仙の香り残して消燈す

船 越 美 喜

百葉箱 大塚まや
春きざす逢ふ目印は百葉箱
過去は過去晩年に買ふ木彫雛
落してもよいなどと言ひ古手袋
今日も亦あしたを待てり春の雪
無住寺や昔の梅がほろと咲く

百葉箱

大塚まや

神麓集



一連の行事終へたる山臈尾
庭の杉花粉は吐かず陽に媚べり
修二会終ふ憩ふ間も無し吹雪来と
涅槃西風父祖の没年早や越えし
早々と小粉^{こでまり}団の枝の芽吹き初む

奥村 鷹尾

白無垢の鴨追ふ鴨の播磨越え
ヒロシマの牡蠣が美味しい建国日
油断すな今寿の友は風邪の神
北山に狐みかけぬ狐坂
すめらぎのめらめら寒中女帝論

荻野 千枝

席入りに一枝が馳走白椿
影うつる遠望堤陽炎ひて
吉田句碑神靈寂に陽炎へる
陽炎は遠目堤の足うばふ
天望む青雲の志と芦の角

岩崎 憲二

暁暗の杜に破魔矢の鈴が鳴る
屋根の雪怒々と落ち込む露天風呂
庄内米育むべしや雪一重
龍の玉路次奥深き勝手口
梅開く袷紗包を目の高さ

高木 智

抽斗の奥の秘めごと春の雪
春雪や喪の水引が見つからぬ
春雪や矢印へひと消えてゆく
曖昧なことばこぼして春の雪
春雪へダルメシアンを走らせる

春 雪 柴田 朱美

霜柱金剛山は遠透ける
雪嶺の見える車窓の響増す
葬列に知人少なく春浅し
芽樹越しに見える他郷は煙いろ
息あらく芽樹の森から吐き出さる

松本 鷹根



京鹿子集

豊田都峰選

京都 境 良一

都路を北向く疏水に寒の鮠
海鳴りを耳朶に海豹廻りづめ
凍て冬を好きとならねば生きられぬ
臘梅やメールに言へぬこと託す
冴え返る萎縮海馬の失語症
明けまして死んだ人から年賀状
鈴鳴らし金柑ほどの願ひごと
お分けしたい手持の時間飾り昆布
息少し抜いて三日の銀の匙
眼鏡拭いても一月が見えにくい
南座の切符むらさき春隣

大津 森 洋子

東京 坂本 敏子

うたかたの生まれ四温の水となる
春時雨濡れつつ百度踏みにけり
春の雪積みゆく夜の百度石
側室の碑は塀の外春の雪
鶴を折る指に野の雪よみがへり
牡蠣を焼く枝を刃物にする漢
もうすこし駈ければ天の風となる
また戦さ二月の光ゲの姫鏡台
伏線は寒牡丹なり道曲る
早春の風の骨格見えます
鳥声も人声もして梅ふぶむ

千葉 伊藤 希眸

佐々木紗知